

2016年（平成28年）調査データ“果樹病害”（愛媛県病害虫防除所）

◆カンキツかいよう病越冬病斑量調査

本年の越冬病斑量は平年並であるが（表1）、病原菌は細菌であり、強力な伝染性・流行性を持っており、防除の不徹底や好適な気象条件が揃えば、たちまち大被害に結びつくので注意が必要である。

1 発生と生態

- (1) 病原菌は、主に病斑中で越冬し、春先気温が高くなるとともに伝染を開始する。
- (2) 病原組織に雨滴が当たると、そこから多量の細菌が飛び出し、次々と伝染する。
- (3) 伝染は、生育旺盛な新葉・幼果・夏秋梢葉の若い組織で起こりやすく、樹齢の若い樹や軟弱徒長の樹で多くなる（特に発病した夏秋梢葉は、本病の越冬伝染源となる）。
- (4) 風速が6～8mを超えるような強風があった場合、傷ができやすくなり、病原菌の侵入が容易になる。
- (5) また、ミカンハモグリガ幼虫の食害痕は、重要な侵入口となる。
- (6) 温州みかん・ポンカン・八朔などは発病が少ないが、主要中晩柑類（愛媛果試28号・甘平・はれひめ等）は、感受性が高いので注意が必要である。

2 病徴と診断

- (1) 本病は、葉・枝・果実に発生する。
- (2) はじめ水浸状の斑点を作り、やがてその部分が盛り上がり、コルク化して病斑の中心は破れて、周囲には水浸状、後に黄色の縁取りがある丸い斑点ができる。
- (3) 葉に激しく発病すると、早期の落葉をとめない、緑枝に発病すると枯れ込む場合もしばしば見られる。
- (4) 果実に発生すると、外観を著しく損ない商品性を低下させる。



写真1 葉での症状



写真2 果実での症状

3 防除方法

- (1) 防除は、3月中旬～3月下旬の発芽前防除、4月下旬～5月上旬の開花前、5月下旬～6月上旬の落弁直後、6月中旬～9月に実施する。
- (2) この間、強風が予想される場合は、その前に迅速に防除する。
- (3) 夏季に夏秋梢に寄生するミカンハモグリガの防除を徹底する。
- (4) IC ボルドー66D・カスミンボルドー・コサイドボルドー・コサイド3000等の薬剤防除と同様に、耕種的防除を行うことも重要である。
 - ア 風当たりの強い園地では、防風対策を強化し、被害枝葉を取り除く。
 - イ 夏秋梢は、かいよう病の主要な伝染源となるため、発病夏秋梢の処分を徹底する。

4 調査データ

表1 伊予柑の夏秋梢を対象としたカンキツかいよう病の越冬病斑量調査(1～2月)

	H28	平年	H27	H26	H25	H24	H23	H22	H21	H20	H19	H18
調査圃場数	166	-	157	155	136	134	131	119	120	236	229	226
県全体 発生圃場率(%)	39.2	46.0	46.5	41.3	51.5	57.5	29	26.9	26.7	37.7	72.6	70.2
発病度	4.0	3.7	6.2	3.7	5.1	5.5	1.6	0.8	1.1	2.2	5.6	5.3

平年:H18～27の平均値

(参考)

表2 伊予柑以外の品種における夏秋梢を対象としたカンキツかいよう病の越冬病斑量調査(1～2月)

	愛媛果試28号	甘平	せとか	はれひめ	はるみ	はるか
調査圃場数	14	14	11	4	1	1
県全体 発生圃場率(%)	71.4	42.9	0.0	25.0	100.0	100.0
発病度	1.3	0.7	0.0	0.4	10.2	2.9

平成28年より調査開始